

國學院大學学術情報リポジトリ

ガムラ・ウップサーラ訪問記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-02-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 雅稔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001378

ガムラ・ウップサーラ訪問記

山崎雅稔

二〇一七年四月から翌年三月にかけて国外派遣研究の機会を得た私は、ベルギー王国のカトリック・ルーヴァン大学に籍をおきながらヨーロッパの国々を旅した。観光地もめぐり、ご当地の料理やワインやビールも味わいながらの道中だったが、古代ローマ帝国の支配の残響やキリスト教の受容にともなう社会変容の痕跡を歩いて確かめてみたいと、ガイドブックにないローカルな場所にも足を運んだ。予約したはずのホテルがあるべき住所になかったり、適用外の割引乗車券を買って高い罰金を支払う羽目にあったりもしたが、遺跡や教会を踏査したり、博物館を訪れて遺物や研究の成果に接して見聞を広めることができたのは貴重な経験だった。

*
*

渡欧中、スウェーデンを二度訪れた。最初の旅は二〇一七年九月一日から一七日にかけての五日間で、ストックホルム、ゴットランド、ウップサーラをめぐる。ブリュッセルからアーランダ空港行きの直行便に乗り、ストックホルムの旧市街ガムラ・スタンを観光したあと、翌朝ニーネスハムンを出るフェリーでバルト海に浮かぶゴットランド島のヴィスビューに入った。この島はゲルマン鉄器時代からヴァイキング時代にかけてつくられた絵画石碑で知られる。ハング同盟都市としてバルト海交易によって繁栄をみたヴィスビューは現在ではリゾート地になっていて、次の日の帰り

の船を待つあいだ季節外れの短いヴァカンスを過ごした。ストックホルムに戻ったあと、市内の国立歴史博物館、北方民族博物館を訪れた。歴史博物館はヴァイキング時代の出土遺物を多く展示していて、メラレン湖のビェルケ島で見された九世紀代の交易都市ビルカなどの発掘成果に接した。中国で織られた絹製品、北アフリカの硬貨、インドからもたらされた銅製の小さな仏像（ヘリエー島出土）は、いずれもヴァイキングの交易世界の広がりを感じさせる興味深い出土遺物だった。そして最終日にはウップサーラを訪ねた。二度目の旅は二月九日から一日にかけてで、コペンハーゲンからロキスレ、オーデンセ、オーフス、リンホルム、イエリングなどデンマークの各都市を歩いたあと、列車でエーレスンド海峡を越えて一泊二日でヨーテボリ、ルンドまで足をのびした。ヨーテボリの市立博物館は、一八世紀半ばに建築された東インド会社の建物を利用した施設で、館内の吹き抜けのフロアにスウェーデン唯一とされるヴァイキング船の残骸を展示していた。一〇世紀末、デンマーク王のカヌートによって建設された古都ルンドには一二世紀のはじめに大司教座がおかれ、一一四五年に大聖堂が建てられた。その地下墓所を支える二本の石柱にはキリスト教に屈服して石になった土地神の姿が彫られている。そのレリーフを見るために、大聖堂の外で凍えながら日曜礼拝が終わるのを待ち続けた。

* *

スウェーデン中部の都市ウップサーラは、ストックホルム中央駅を出る直通列車に乗って一時間あまり北上したところにある。ガムラ・ウップサーラは、ウップサーラの古い歴史地区で、現在の市街地の北五キロメートルに位置する。私は九月一七日の午前中にここを訪れたあと、市街地にある大聖堂を見学して、夕刻の便でアーランダ空港からブリュッセルにもどる計画を立て、ウップサーラ中央駅前のホテルに前泊した。ガムラ・ウップサーラは、中央駅のバスターミナルから一一〇番の市バスに乗って一五分ほど着く。スマートフォンアプリには経路と降車する停留所が表示されていたが、実際に乗車してみると、車窓からは事前にチェックしていた墳丘も教会もみえてこない。スウェーデン語の

降車案内も聞きとれず、結局ひとつ先のバス停のところで行き過ぎたことに気づき、急いでバスを降りた。車道を引き返していくと、公園の入口とおぼしき道に入る何台かの車がみえた。おそらく案内板もあったのだらう。木々にかこまれた道を歩いていくと、小さな博物館と教会、その奥に連続して築かれた墳丘が目に入ってきた。

ガムラ・ウップサーラは、ヴァイキング時代に先行するメラレン盆地における祭政の中心地であったとされる場所である。ウップサーラの地名は早くは九世紀の石碑に刻まれていて、『ユングリング・サガ』など中世の文献にはユングリング朝の所在地として登場する。考古学的には鉄器時代から中世にかけての遺跡群が分布し、六世紀代を中心とする王墓群やホール状建築物（ロングハウス）、ヴァイキング時代にかけての異教神殿址とも目される遺構などが見つかっている。この地には三〇〇〇基をこえる墳墓が存在し、新旧二つの大型墳丘墓群がある。私が見たのは新しい方のそれで、一般に王墓群と呼ばれている。基本的には三つの墳墓で構成されていて、東の墓は七七メートル×五五メートルの楕円形で、高さ九メートル、六世紀前半の築造とされる。被葬者は少年で、中年の女性を殉葬する。中央の墓は七五メートル×五〇メートル、高さ七メートルで五〇〇年頃の築造とされるが、本来は二基の墳墓であり、それらが重なり合ってきたのではないかと考えられている。西の墳墓は六七メートル×五一メートル、高さ一〇・五メートルで、六世紀末頃の築造とされる。被葬者はフランク王国製の衣服をまとった成人（おそらく男性）で、副葬品も国際色豊かであったという。

これらの墓は北欧神話の神々の名を冠して、オージンの塚、フレイの塚、ソールの塚とも称される。また、『ユングリング・サガ』はアウンとエギル父子、エギルの孫アジルスという三人の王が眠る墓だと伝えている。ただし、東の墓に隣接する「集会の丘」と呼ばれる土盛りの下層から積石が見つかっていて、もとは墳丘墓だった可能性があり、三王の陵とみなす見方自体、伝説的というべきかもしれない。何組かの家族連れが墳丘に登っているのを見て、私も登ってみた。妻がそこは立入禁止だと合図を送ってくれたが遅かった。墳頂からはウップサーラ市街の方角に小さく大聖堂が

見えた。墳丘の西側には遠くまで耕作地が広がっていたが、博物館の展示によればそこはかつて湖だったようだ。

* *

ガムラ・ウップサーラ教会は、小径を挟んで東の墓の北側に建っている。石組みの壁に木瓦葺きの建物である。墳丘墓と教会が居並ぶ光景は、古代日本の権威の象徴物が墓から仏教寺院へと移り変わるさまを見ているような錯覚を抱かせてくれるが、墳丘墓と教会のあいだには数百年の隔たりがあつてそう単純な話ではなさそうである。現存する石造りの教会の床下からは、一九二六年の発掘調査によって木造建築の教会址が見つかつていて、さらにその下層からもヴァイキング時代の柱穴列が検出されている。この柱穴列は当初異教神殿の痕跡とみなされてきたものである。一〇七〇年頃にブレーメンのアダムが著した『ハンブルク・ブレーメン教会の司教の偉業（ハンブルク教会史）』によれば、スベアランドのウップサーラには異教徒が建てた神殿があつたという。同書とその注記は、黄金で装飾された神殿の祭壇にはオージン、フレイ、ソールの三神の神の像が祀られていて、九年ごとに行われる大きな祭りの期間には神への捧げ物として近くの野に人や動物が吊されたこと、供犠奉納用の泉が存在したことを伝えている。柱穴列を異教神殿址とするのはこの記録にもとづいている。しかし、一八世紀に焼失した異教神殿の位置を記した中世の記録の復元研究によって、二つの教会と神殿址が同じ場所に建つていたとする見方は否定されることになった。

最下層の建物址の性格も気になるところだが、「神殿」もしくは「寺院」と訳される *templum* がいかなる建物であり、どこに建つていたかという問題は、キリスト教受容以前のウップサーラの祭儀を解明する上で重要である。この点に関して注目されるのは、考古学的に明らかにになったホール状建築物の存在である。教会の北側には人工的に造成された高台があつて、六世紀の五〇メートル×一二メートルの建物址（これに三角形の建物が付属する）、それより小さい七世紀に建てられた建物址が見つかつている。一般的にこうした建物址からは金属製の装飾品やブラクテアート、鍍金された小像、舶来品などが出土し、大型墳丘墓が隣接する。そこは地域首長の政治拠点であり、ホール状建築物は集

会や饗宴を行う場であったとされる。一方で、アダムの記事をふまれば、ガムラ・ウップサーラに集う人々是这样したホール状建築物の屋内に神々の偶像を祀っていたらしい。七世紀代の建物址はヴァイキング時代に焼失し、その後再建されなかった。ただし、一一世紀においてもキリスト教徒となった王やシグトゥーナ司教が異教神殿を破壊しようとして激しい抵抗にあったというから、神殿は焼失後場所を移して建てられるなどして、祭祀は継続的に行われていたとみるのが妥当であろう。

* *

ところで、じつは私が訪れたその日は、ガムラ・ウップサーラ・ミュージアムでは発掘成果の報告会が開催されており、つめかけた多くの市民でにぎわっていた。建物の二階にある小ホールは専門家による講演の最中で、立見が出るほどの盛況ぶりだった。考古学ファンというよりは家族連れが多く、熱心に耳を傾ける若者や子どもたちの姿が印象的だった。聴講したいという気持ちは私にもあったのだが、スウェーデン語による話の内容はまったく分からなかったもので、早々にあきらめて一階のエントランス・スペースで行われているパネル展示を見ることにした。

出土遺物を観察していると、発掘を担当した男性が「それは白鳥をモチーフにしたステンドグラスのペンダントで、イタリアで作られたものだ」と、ゆっくりとした英語で教えてくれた。七世紀の女性の墓から出土した副葬品だった。イタリアからどのように運ばれたのかと尋ねてみようとしたが、自身の英語力に臆しているうちに、隣にいた大学院生らしき女性にその機会を奪われてしまった。彼女が熱心に確認しようとしていたのは、王墓群の近くで発見された柱穴列の詳しい場所や性格についてであり、発掘担当者も地図を開きながら丁寧に説明しようとしていた。それは王墓群の東に数百メートル離れた場所で見つかったもので、南北一キロメートルにわたって一直線にのびる柱穴列であった。柱穴列はこのほかに王墓群の南でも五〇〇メートルにおよぶ直線上で確認されていて、これらが報告会の大きな目玉だったと思われる。このとき入手したパンフレットやその後ウェブ上に公開されたプレス用資料にもとづいて、以下にガム

ラ・ウップサーラに関する新知見の概略を整理しておきたい。いずれも原文はスウェーデン語であり、誤訳・誤認が少なからずあると思われることをあらかじめお断りしておく。

まず、柱穴列はオールド・ウップサーラ・スクールの東に位置する直線道路の下から出土した（地図で確認すると北端は旧河川のあたりまでのびている）。等間隔に配置された柱穴は全部で一四四か所にのぼり、柱穴の幅は約一・五メートル、深さは約一メートルあり、柱を支えるために使われた石も残っていた。一つの柱に一・五トンの石が使われていたという。一部では柱の基礎部分も検出された。木材は一五〇〇年前のものとされている。多くの柱穴からは馬・豚・羊の骨のほか、堅果類が見つかっていて、儀式の際の食事の残留物と推測されている。仔犬一頭分の骨がほぼ完全形で出土した柱穴もある。柱を立てるか廃棄する際に捧げられた犠牲とみることができる。詳しい言及はないが、柱の高さは地上四〜五メートルあり、古代の直線道路に沿って立てられていたと推定される。このような柱列は、『アイスランド・サガ』に記される領土の境界線か、儀式を行う際に用いられたものと考えられるという。柱列は王墓群・異教神殿のある聖域とその外部を隔絶して権力の所在を明示するものであったと思われるが、他の類例をみなければ何とも言いがたい。

つぎに、柱穴列のさらに東にある墓域の一二九の墓が調査されている。六〜一〇世紀、ヴェンデル時代からヴァイキング時代にかけて造られた墓で、両手持ちの剣やガラス容器、宝石などの副葬品が出土したほか、イングランドやフランスのガラス製品、アラビアやドイツの硬貨、オリエンタル・ボタン、地中海でつくられたモザイクの白鳥（前述したペンダント）が見つかった。金メッキを施した小さな神像も女性の墓から出土した。この偶像是ハンマーや槍など神の属性を示すものがなく、いかなる神の像かは不明である。また、七世紀代の墓からリング状の金属の織物片が見つかった。くさび帷子の類いでヘルメット（兜）等を装着する際に使用されたものである。ただし、この墓の被葬者も女性であり、どうして副葬されたか疑問がのこる。王墓群近くの農場では多数の堅穴住居址が発見された。それらのなかには

紡績などの作業場として利用されるものがあつた。パンフレットに写真で示された住居址は、機織り工房として利用されたと想定されている。たしかに、住居址にしては一人か二人が中に入るのがやっとで生活するには狭い。ガムラ・ウップサーラでは貿易や手工業製品の製作が行われ、宗教儀式や裁判が行われた。定住者もいれば特別な場合にのみ訪れる者もいた。住居址はこうした当地域の歴史的性格と関わって理解される。このほか、教会の北側の発掘現場でも遺構が確認されていて担当者による説明が行われていた。場所はホール状建築物址の南であり、ヴァイキング時代の異教神殿に関連する施設かと気になったが遺構の年代や性格は分からなかった。

異教神殿の終焉と教会の建設は、スウェーデン中部の社会変容にかかわる大きな出来事である。スウェーデンのキリスト教化は北欧諸国のなかでも遅く一二世紀後半まで待たなければならない。キリスト教に関心を抱いた異教の王が八二六年にビルカから皇帝ルイ・パイアスのもとに使者を遣わしたのを機に、ハンブルク・ブレーメン教会の大司教アンスカールのビルカ巡礼（八三〇年・八五二年の二度にわたる）が実現し、ビルカにはキリスト教区がおかれた。交易活動によつて成長したビルカの勢力は、ガムラ・ウップサーラなどスウェーデン中部の伝統的な祭政の中心地をおさえるようにして地域社会の統合を進めたとみられるが、キリスト教が異教の信仰を払拭するには多く時間が必要だった。シグトゥーナに司教座がおかれたのは一一世紀後半、ガムラ・ウップサーラに大司教座がおかれたのは一一六四年のことである（大司教座は一三世紀後半に市内の大聖堂に移されている）。ガムラ・ウップサーラの地は、ヴァイキングが登場するはるか昔から一一、一二世紀にいたるまで政治的・宗教的機能を担ってきたのであり、大司教座の設置とともに一つの歴史を終えたとみることができる。ユングリング朝の所在地とされるこの地は、その後も中世スウェーデンの王の權威とも密接にかかわっている。王位の継承はムーラの石の上に立つて継承者としての承認を受けたのち、ウップサーラを起点とするエーリク通りを巡幸することによって達成されたし、王の所有する土地は「ウップサーラ王領」と呼ばれていた。中世の王はこの地にみずからの起源があると認識していたのである。前述の柱穴列をエーリク通りの性格に

重ね合わせるのは安易かもしれないが、穿った見方をすれば、王墓群と異教神殿、あるいは教会とともに、道路はこのガムラ・ウップサーラにおいて何らかの権力装置としての役割を果たしていたのではないだろうか。

一通り見学を終えたあと、バスでウップサーラの市街地に移動して、大聖堂とそれに隣接するウップサーラ大学の付属博物館を訪れた。博物館では考古学研究チームがかかわったヴァールスヤーデの船葬墓の発掘成果にふれた。七月にロンドンの大英博物館でみたサットン・フーの船葬墓（イースト・アングリア王レッドウォールドの墓とされる七世紀前半の墓）の副葬品は、ヴェンデルやこのヴァールスヤーデの出土遺物との関連性が指摘される。リンホルムの丘陵地一面に広がっていた船型配石墓群では火葬が行われたが、この墳墓群はすべて土葬である。ガラス張りの床面に実寸大で展示された遺構の様相は、一艘の船の上に被葬者と鉄製の兜や剣をはじめとする豊かな副葬品を納め、複数頭の馬を殉葬した見事なものだった。ヴァイキング時代にも流行する船葬墓について少し調べてみたいと思い、ミュージアムショップで英語版の発掘報告書を手に入れて、キャンパスに野外展示されていた絵画石碑をみて大学を後にした。発掘時刻には間に合いそうだったが、運河沿いのまばゆい光景を堪能しながら早足で駅を目指し、売店で遅いランチを買って列車に乗り込んだ。

* *

私は日本史を専門としていてヨーロッパの歴史にうとい。しかし、閉ざされた地域・時代・分野を越えて歴史と歴史研究のあり方を模索することも時に必要であろう。東西ユーラシアを比較したり、横断的に歴史を俯瞰してみれば、これまで考えてこなかった歴史に気づくことも多い。帰国後そのままになっていた調査時のメモや撮影した写真を整理しつつ、現地のことを振り返っていると、日本やアジアではどうかという問いに思い至る。ガムラ・ウップサーラの異教信仰とキリスト教の接触は、東アジアや日本の在来信仰と仏教の受容の特質を考えるうえで有益な示唆を与えてくれるように思われるし、祭祀空間の構造や船葬墓に見出される死生観は日本と比較するだけでなく、より広い視点で検討さ

れてよい。もともと、北欧の先史から中世にいたる歴史を学ぶだけでも、見るべき遺跡も史資料も研究も多く、専門家でなければ手に負えないのも事実である。ここで取り上げた発掘成果や研究内容についてもアップデートが必要であろう。ウップサーラだけでなく周辺諸地域の歴史を見つめながら、北欧からヨーロッパ、そしてユーラシアを眺める歴史のパススペクティヴを模索してみたいと思うのだが、これらについては他日を期したい。

〔参考文献等〕

ガムラ・ウップサーラの考古学上の成果については、ヒースマン姿子『ヴァイキングの考古学』（世界の考古学①、同成社、二〇〇〇年）に拠って整理した。異教神殿に関しては、ウルフ・ドルビーン「古代北欧の宗教とキリスト教」（鈴木靖民編『古代日本の異文化交流』勉誠出版、二〇〇八年）を参照。本文中にふれたプレス用資料はガムラ・ウップサーラ考古学会のホームページからアクセスできる。アドレスは以下のとおり。<http://extralansstyrelsen.se/arkelogigamlauppsala/Sv/press/Pages/default.aspx>（二〇二〇年一月六日閲覧）。

追記

スウェーデン国立歴史博物館は、二〇一九年六月にガムラ・ウップサーラの教会付近で発掘調査を行い、二基の船葬墓が発見されたことを発表した。ヴァイキング時代の火葬墓で、ヴェンデル時代に遡る可能性もある。一基は一六世紀の地下室建設の際に破壊されたが、残る一基はほぼ無傷で、船尾に男性の遺骨と剣・盾・櫛などの副葬品を納め、馬・犬の骨が一体ずつ埋められていた。船葬墓自体スウェーデンでの発見例は少なく、被葬者は社会的地位の高い人物と考えられるという。旧教会と墓域の関係が問題となるが、ガムラ・ウップサーラのヴァイキング時代の景観と社会の位相を考えるうえで、たいへん興味深い発見であり、今後の調査成果が期待される。<https://www.history.com/>

news/viking-boat-grave-discovery-sweden参照（二〇二〇年一月六日閲覧）。